

取不捨の由へにいふなり、蚊に喰はれ小言云ひつゝ、轉た寐した子が
眠覺めてみれば蚊の聲のみで蚊もさゝず、安樂由へ不審に思ひ、能
くくみれば夢中で知らぬ間に母が蠅を釣て吳た中に居た煩惱の蚊
にさゝれ小言いひつゝ、五欲の睡眠に耽りたる内、煩惱の蚊は聲高く
相變らねども、小言いはれぬ様になりしは、阿彌陀様の母親が攝取
の蠅を釣て下された故でありますまひ歟。

第八十七 持物に依て行く先を知る

因果の道理を知らぬものは、未來を無視して仕舞ますけれども、現
在の因果を知らば未來あるを疑ふ道理はなひのです、不養生にて衛
生を怠り、健康を害したるは順現業である、法度の博奕をして懲役
になるも、順現業試験毎に落第するも、平生懶惰の順現業である、
他の三年の業を一年に卒業したるは、性質の才智によるこはいへ勉

強の順現業である、人望多く美名高くなるは慈善の順現業である、
たごひ順現業にあらはれざるも、順次業順後業と顯現せざるはなき
が因果の道理である、誰が死去た行先をみたるやこいふものあり、
耳を傾けて聽きたまへ、死んで行先を見届けはせねども、其携帶す
る物柄によりて、行先を推察すれば明かである、釣竿や網を肩にし
て道路を進む姿をみれば、捕魚のため河邊に行くことを疑ふものは
あるまひ、肩衣を掛け珠數を擦りつゝ、念佛して居るをみれば、寺參
り或は法席に出るものと定めて間違はなからふ、若し鈍竿を肩にし
た人が説教聽聞に行くこいはゞ、姿の不都合を咎めて宜しからふと
思ふ、我等の心の持物は何であります、貪欲の釣竿や、瞋恚の網
や愚痴の筒袖といふ姿、是非共行く先は三惡道と見認めねばなりま
せぬ、若しその姿にて淨土行であるこいはゞ、不似合を咎めねばな

りませぬ。

第八十八

蟪蛄は春秋を知らず

蟪蛄に寒暖計の昇降如何を問ひましたなら、八十度より九十三五度の間を昇降するに限ると答へませふ、春秋を知らぬもの故、然るべき道理であります、霜雪降りて寒冷膚を侵すことあるを知るや否質問したなら、其様な事はある筈なしと答ふであります、又梅子をみせて大中小の差及熟不熟の異、美醜肥瘦の違ひ同じ梅子にして、斯く差別あるは何故ぞと蟪蛄に質さば、敢て道理なしと應ずるならむ、是春以來の事を知らざるものなれば、然あるべき筈である、人間の上にていはゞ、面容に美麗あり醜體あり、百人集れば百段あり月々千圓宛貫ふ官吏あり、月に三圓の雇あり、蒲團に座を占て烟草呑みながら日に幾百圓の利子を得る商人あり、今日は喰ふたが明日

の米代なし、車を七つ屋へ入れて仕舞ふ譯には行かずと夜も寝兼て夫婦相談する車夫もあり、一升も吞て平氣に笑談する上戸あれば、小杯で一口吞たら頭痛がする顔しかめる所の下戸もある、今日は餅二十と茶漬八碗喰ふたといふ壯夫あり、天井板の木目まで映る様な粥一啜が六ヶしひと泣聲する病人もある、種々無量の段別之を蟪蛄と梅子を視定する様に道理なしといひ去る譯には行きますまひ、蟪蛄は春秋を知らされども、人間は春秋を知て居ませふ、同じ梅子でありながら、差別のあるは道理あるものといはねばならぬ如く、同じ人間でありながら、差別のあるは道理あるものといふべきである、先梅子の方より申さんに、蟪蛄よ耳を傾けて聴け梅は春といへる夏の前にある、陽氣に花を開き其花の葩は五片あり、其内に蕊ありて、善き香ひを持って居る、然に花の時節太陽に面じ且怪俄なく全

く花の進んだは、梅子も全くして色よく肥て居るのである、又花の時節鳥に蹴られ風に吹き落され、種々の外縁に障り怪俄したる花は梅子も亦不具となり、色悪く瘦て居るのである、太陽に背ひた所に育ちたる花は不具にならざるも色は善くなひと申し聞かせても、蟻姑は春秋を知らぬ故、疑ふて信ぜざるにもせよ、人間は疑ひありますまひ、されば之を人に移して申してみませふ、人間に生るゝは五戒を持つ功力によるご経説にありて、五葩の花の怪俄なく全く終りたが肥で色よき梅子となる如く、容貌其他満足に生れたが其人である、教への日蔭に育ちたるが色のよからぬ梅子の如く、生涯病氣に苦んで薬三味に暮す人ご成たのである、如是因果の道理明かに成てみれば、他人の幸福を妬むより己が前業を明らかに明らめて、未來の善報をうる善因を求めねばなりませんまひ。

第八十九

味の濃淡も因果による

細君の手料理提重を以て烟火見物に行き、四方來集の中に負けず劣らずの顔付にて座を占め、瓢口を取て一盞を傾け、重箱の盞を取り料理の塩梅を試るに、其味甚だ善らず、むしくして居る所へ二三軒隔てた先に知己ありて呼び掛た、座を立て一献を受け下物を口にすれば至極美味なり、ますく細君に不平を起して心中穩かならず烟花の未だ半ならざるに、飛が如く我家へ歸り、細君を叱り付ていふ様、何故此様な無味な料理をいたした歟、ふみつけるにも程がある、他人の中にて大恥を搔たごいへば、細君は徐々口を開き、まあ御静になさりませ、料理の辯解致しませふ、今日の料理の無味なるをお咎めなさるは、彼方の御無理で御座います、味を善くするごは私も承知して居ます、然に砂糖を入れ様ごすれば酒の肴に甘ひ

のは嫌ひゆへ砂糖入るゝなご、仰しやつたのですお覺へが御座いま
 せふ、酒塩にこませふと申したら、酒塩にするだけ酒で吞む方がよ
 ひから、瓢箪の大なる方へ移せと仰しやつたのです、是もお忘れは
 なされますまひ、而して無味をお咎めになるは聞かませぬ様に存じ
 ます、御友達の御料理は仕出し屋へ御誂の品にて、自家の料理に比
 すれば十倍の高價であります、御金さへ渡して下さればいかほご味
 善さ物でも致しますと、逆まにほしんごやられて閉口した男があり
 ました、今之を仲裁いたしてみれば、今となりて料理の無味を彼是
 いふより今回の事は既往咎めずとして、將來の時には金を惜んで細
 君にいひこめらるゝ様な不體裁をせず、前以て金も心掛置充分味も
 善くなる程元入して立派にごのへ、今回の恥を雪ぐ積りで、今よ
 り將來を樂み待つが肝要であるまひ歎、生れ損ふた今世の不仕合藥

呑みつゝ生涯弱ひ身の上や、又勞働しながら一生貧乏暮し、或は智
 惠學問ありながら、出世も出來ずに零落する如き、皆是前世の料理
 の元入れ足らなかつた結果である、元入れ薄かつた不都合は咎めて
 も悔んでも、今更甲斐なき次第なれば、今世の事はあきらめて何卒
 未來といふ將來の提重に無味の料理を造らぬ様、他方信心の元入を
 もらひ、御恩報謝の稱名念佛相續して、百味の飲食を七寶樹林の下
 に開き今回一度の恥ではなひ、無始已來恥搔た身が、三世十方の諸
 佛の中で立派に恥雪きして、快く淨土の春秋を樂む事を今から待ち
 樂む様になりて、日夜を送るが肝要であるまひ歎、兎角因果の道理
 を辨へなひご我身で我身を責る過ちが出て來ます。

第九十 財布を呼ば、金を渡せ

いや忘れ物したとて途中より歸りた、何を御忘れなされました、財

布を忘れた、早く持來れといふに應じて細君は空財布を主人に渡した、主人は中の金をいかゞしたと質せば此所にありますと答へた故何をもて財布から金を出せしぞと再び質せば、財布を持來れとの命ゆへに、財布のみを差上りましたと應じたといふ話がある、斯様の誤りが念佛門の人に多くあります、彌陀の本願と申すは名號をこなへんものを、極樂へむかへんと誓ひたまひたと聞て、稱ふる聲のみ受取て、信心決定せずば金なき空財布を握りた様なものである、財布とは財あればこそ名くるなれ、金に用事があればこそ財布を呼ぶなれ、金を除てといふ意ではなひ、ちんく音のする鐵瓶は蓋の吹き上る前に、湯は沸騰してあるのである、沸騰した故音の出たのである、南無阿彌陀佛と稱ふる聲は蓋の音、その音の出る前に信心の湯は充分沸騰したのである、前の空財布を持て出た細君は叱られて座

敷に入り、此回は銀貨を手掴みにして持來りた意は、主人が財布といはゞ金が入用故なりといふ言に就て、財布を残して銀貨のみを出したのであるから、是で宜ひと主人も許す事は出来ませぬ、此早合點に類した誤りが彼信心一つと御勧めに預かつた故、稱ふるには及ばぬと念佛を廢して、御恩報謝を知らぬ同行である、念佛を廢する信心なれば他力の信心ではなひ、信心のなひ念佛ならば他力の念佛ではなひのです、信を強くす、むれば邪見になり、行を強くす、むれば自力になるにて、御痛心遊ばしたも是等の類あるが爲めでありませふて信じ稱へつ、能信能稱の機功を募らず、所信所稱の法徳を仰ぎ尊とみて、彼地方此地方といふ如き黨派に組せぬ様いたすべきことであります。

第九十一

念佛爲本と信心爲本

念佛爲本は法然聖人の御流義にて、信心爲本は親鸞聖人の御流義なりといふ事は、誰れ知らぬものはなひけれども、法然流親鸞流と兩聖人を氷炭相容れざる御流義の様に心得誤る者あるをみれば、知たものなほしといはねばならぬ様である、信心爲本と聞て念佛を廢するものは、法然を泣かせる耳ならず、親鸞をも泣かせるのである念佛爲本と聞て信心を輕んずるものは、親鸞を痛めるのみならず、法然をも痛めるものである、兩聖人の御本懷は其様に氷炭相容れざる御流義ではありませぬ、時機の別あるため且らく御勸振に差はあれど其は表面の事にして、表面より伺へば別なしと申さるゝのである、例は法然聖人は聖道門といふ、他國交際なれば念佛爲本と名乗りたまひ、親鸞聖人は自國交際なれば、信心爲本と名乗りたまふこそすれば誤りは生じませぬ、若し旅行いたした時、三百里外の他國にあり

て、卿は何國の人ぞと尋ねたらば自國の名をもて應ずるでありませぬ、一里や二里隔てたる自國內にありて卿は何處の人ぞと尋ねたらば町村區名をもて應ずるでありませぬ、他國に在て自國をもて我住所を答へたごとく國中に我一身が充満して居るのではなひ、國中に所定めずうろくして居るのでもなひ、自ら住む場所は確と戸籍が定まりて居ます、念佛爲本と聖道門の對手に名乗りたまふ、念佛爲本の内へ入てみれば、以信爲能入といふ動かすべからざる戸籍は定まりてありて、念佛の行者必ず三心を具する決して無信にうろくするものといふ事ではなひ、信心爲本と淨土門の國內に名乗りたまふ信心爲本の外へ出んとしてみたまへ、眞實信心には必ず名號を具するごありて、念佛を廢する信心爲本ではなひ、ねてもさめてもへだてなく南無阿彌陀佛をこなふべき家柄なるは明かである、姉は此友

禪が喜び、妹は此絹緇が善ひと姉妹相争ふを聞て、能く質せば姉は表のこ妹は裏のこを申したのでありて、裏を姉に問へ絹緇と答へ、表を妹に問へば友染と答へ、畢竟同意でありたといふ話、念佛爲本の法然聖人に内はこ伺へば、信心このたまひ信心爲本の親鸞聖人に外はこ伺へば念佛このたまふのであり。

第九十二 緋縮緬の下着は孫娘の爲

信心爲本の信心とは、因願に伺ひ入れば至心信樂欲生と説きたまひてあります、至心は至徳の尊號が體であります、欲生は諸有の群生を招喚したまふ勅命であります、招喚は六字の上にては、阿彌陀佛の四字を離れぬ所の南無の二字である、乃て至心は名號欲生は本願といふ助けたまふ基本の正札が附きます、此中心に助くるに間違ひないといふ御決心の疑蓋無雜といふ信樂か入てあるものもへ大悲の

御親に接觸した行者の信心も、疑蓋無雜なるのである、此所に一寸不審を起すものがありて、行者の方に疑蓋無雜といふは信相なること勿論なれども、阿彌陀如來が決心したまふ、疑蓋無雜と申すことは聞へ難しといふのである、此不審一往尤の様なるが佛意を得ぬからであります、阿彌陀如來の決心と申すは、佛が往生に間違なき信したまふといふ事ではなひ、緋縮緬の下着を購求して居る婆々ありといはゞ、一往不審が起る彼婆々は狂氣人であらふ歟、古稀前後の年らしひに緋縮緬の下着を被ることは可笑ひと思はるゝ、能く聞き質してみたまへ不審は晴れませふ、購求するは婆々なれども孫娘が嫁入する爲に購求するものと分つたら疑ふ所はありませぬ阿彌陀如來が法藏比丘たりし時、菩薩の行を行したまひしに、一念一刹那も清淨眞實ならざるなく、我等が爲に廻向成就したまふと聞かば疑

ふへき所はありますまひ、緋縮緬の下着は娘の爲め、疑蓋無雜の佛心は我等の爲こは、有難ひでありませぬ歎

第九十三 到着地の見れた歡喜

某労働者が久しく布哇に出稼を致して歸國の節、數日間一點の眼睛を支ふるものなき太平洋に、偶ま望遠鏡によりて豆大の物が目にみれたり、彼物は何ならむと船長に問ひしに、日本であると答を耳にした時の嬉しさ比すべきものは無かつたといふ話がある、佛界に達するまで五十二段の内四十段は渺々たる太平洋なるが、四十一段に至りた時が、豆大の物に日本を見認めたる嬉しさが始めて生ずるのである、故に四十一段を初歡喜地と名けます、此後猶七地沈空の難關所あれども無漏智を得て眞如の一分を將來に見定めの出來たので不定を脱することに成た爲に、歡喜せらるゝのである、我々は横超

他方の高底により、聞其名號信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼國即得往生住不退轉と説きたまへる如く、一聲の稱名念佛が口に出ぬ先に、歡喜地同等の位地に至るのであれば、いかばかり喜んでよひのであります、布哇に出稼した労働者が日本を豆大の物に見認められたのが比すべき物のなひ程嬉しかつたは間違なく、日本に到着出來ると安心したからである、無始已來迷界に在て煩惱に苦められた労働者が、間違なく淨土に到着することが近きにありと安心が出來れば、喜ばずには居れぬ筈。

第九十四 心は花になせばなる

古歌に「形こそ深山隠れの朽木なれ心は花になさばなりなむ」とありて深山に育ちたる樹木ならば、花はありても見る人はなひ、況や朽木に於てをやである、人として逆境になれば深山の朽木同様に

らねばならぬ事もある、たごひ形の上は朽木といはれても、心の上に花を咲かせ實を結ぶことは出来るのであるから、いかほご零落する身たりとて自暴自棄してはなりませぬ、形も心も共に花なる人を忠臣藏の演劇に云はゞ、大星由良之助（大石藏之助）であらふ、形も心も共に朽木なる人を同演劇にて云はゞ、九大夫の椽の下に居るのを指して、九太が石歟石が九太歟石九太報ひ歟アハハ一など、滑稽を饒舌る伴内であらふ、形は朽木なれども心は花なる人を云はば寺岡平右衛門（寺坂吉右衛門）であらふ、身分は足輕なれども身命を投棄て、主恩に報はんご大石に吾妻行の随伴を請ふたのである、舞臺でみるご暫くくご呼掛て出る姿絲鬚奴の一下郎尻がらげして浅ましき様子は、朽木同様世に知らざるものではなひけれども、大石に嘲弄された時、二千石御取りなされた貴方様も、二合半の糊米

頂ひた此下郎も、繋ひだ命に二つはなひ、受た御恩に替りはなひご涙に咽ぶ彼れが赤誠見事なる心の花といはねばならぬ、形は花なれども心の朽木なる人を云はゞ、椽の下の九大夫である、身は家老の榮職にありながら、主人の忌日に鮓を口にし主人の仇に同腹し、己が利慾を貪るといふ無道の人間、是等を人面畜心ご申すべきでありませぬ、斯く並べたるを昔話に聞き流してはなりませぬ、前業の所感にて貧苦に病苦を重ね、偶ま病苦を去るときは犬猫同様、他人の用に追ひ使はれ、いつもく心の安まる事なく、無宗教にて生涯を終るものは娑婆の舞臺の伴内である、今生の果報は前生の殘因が善かつたが榮耀榮華に日暮しの出来て居る身なれども、後生ごも菩提ごもつゆ心に掛ることなく一生を果たすものは九大夫の類であるまひ歟、一世の生活は貧しけれごも分に安んじて不足を口に洩すご

なく、却て未來の大果報を喜ぶの助縁となし、心豊に稱名念佛しながら職業勵みながら光陰を送り行く人は、所謂淨土行の道中なれば形は朽木ながら心は花盛りであるから、寺坂吉右衛門同行ご申してよからふ、身は高位高官或は富農豪商にして佛教を信仰し、心も安樂身も安樂といふ二世安樂者は形も花なり、心も花なり、義士傳の大石に比する位に止まりはせぬ、併此様な類に入る事は必ず少數なるべし、然れども形の朽木ながら心は花盛りといふの類には、私離れて佛祖の教訓に順ふばかりでなられますゆへ速にならふでありませぬ歟

第九十五 兒島高德の赤心白書

兒島高德は有名なる勤王家にして、偶ま天莫空勾踐時非無茫蓋と櫻木に白書して、赤心を現はした事は世人の知る所であります、古人

が「唐くにの文字を櫻にわりしよりやまご心の花は咲きけり」と讀みましたも此意である、我々は支那や朝鮮の文字でなく、安養淨土の御親の眞心を眞心徹到と彫付て頂きませふ、和讃に眞心徹到するひごは金剛心なりければ、三品の懺悔するひご、ひごしと宗師はのたまへり、やまご心の花は此界に止まれども、眞實信心の花は彼世にまで散らずに咲き續くのであるときけば、いよくたのもしき事であります。

第九十六 就人立信就行立信

就人立信と就行立信と立信の仕方は、いかなる差別ありやといふに例は此に吳碧山の一軸あり、他より金錢を貸たる方へ預け置しものといふ、未だ眞偽と眞價とを知らず、依て貸たる五百圓返金の時期を待つのみ、然るに時期を過ぎて借用人に至らず質流しならむ事を忍

れ慄く折に、支那人の斯道に明るき何某來り云く、此家に吳碧山の
 一軸ありと聞きまじたから一覽を許されよと、豫て心に掛りし折な
 れば鑑定を思ひ立ち席を興へて一覽させたるに、吃驚しながら口を
 開く様此軸は吳碧山が生涯に於て、二軸と目された内の一軸である
 實に珍品なる物若し御譲りが叶ふならば二千兩を呈すべしといふ、
 此一語に従來の不審忽ち晴れ質流れを案じ煩ふた心が反對になり、
 流質となればよひと希望が起りて來た、何故に急に不審が晴れたぞ
 と申すに、御譲りが叶はゞ二千兩を呈すべしといふた人を信用した
 るに由るのである、之を就人立信と申すべきであります、又鑑定の
 出來た其人に在て二千兩に一軸を譲り受んとするは他人の口に乗て
 いふにあらず、自ら其品に見る所あり、絶品なる事を知り得て申す
 のなれば、之を就行立信と申すべきである、我等が本願名號の由れ

を聞て信ずるといふも右の一例をもて何れも相當するものぞといは
 れ、眞物の軸を未審に附して居た者が、斯道に達した人を信用して
 眞物を疑はぬ様に成たといふ、就人立信の類であらふと思ふ、我等
 のみではなひ、我宗祖大師の御領解が左様で有た、既に親戀に於て
 は只念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰せを蒙む
 りて、信ずる外に別の子細なきなりと、御述へ遊ばしてある、信じ
 てみれば就人就行と長く別したものにあらず、終歸一であります。

第九十七 客も車夫も満足

田舎の旅客都會近く雜問の地となるも、節儉を守り乗度所の車にも
 乗らず疲れた足を引ながら杖に攀り歩む時、一人の車夫あり此車に
 乗て下さひとすゝめた宜しひと斷はれども金錢は入りませぬ乗て下
 さひと頻りにすゝめる故、心地悪く逃る如く足を早めけるに或店の

番頭が飛出し來りて、旅の御方さん前刻より彼車夫が乗車を御す、
 め申すに、御懸念ある様子を見受ますから一往理由を私より申上ま
 せふ、彼車夫は何歎思ふ所ありて神佛に誓ひ、千人の旅客を無賃に
 て乗車させます事なれば、御遠慮には及びませぬ乗て下されば彼れ
 の満足であるご、什伍を聞て不審が晴れたら疲れた足を杖にすがり
 て一足引させずとも宜しからふ、畏れ多き申し方なれども六字の車
 をもて、阿彌陀如來が乗れよく乗て呉れよと呼びたまふのである
 大聖釋尊は早く阿彌陀如來の仰せに順へよご、飛出して來ての御教
 へである、引續て龍樹天親ご次第く御諭し下されたのである、
 別して我宗祖大師は乘てみせて下されたといふ、御親切疑ひ怪む筈
 はなひ、衆生苦惱我苦惱衆生安樂我安樂、ご頂れば乗た客も安樂な
 れば乗せた車夫も満足なるが如くである。

第九十八

あ、我往生は疑ひなし

勝願大僧正或時迷子を歸路に連れ來り、爾來各處に張札をなされた
 が三周日過ぎて一婦人來り云ふ様、一兒を路に拾ふ心當りの者尋ね
 來れこの張札を今朝見受ました、何卒逢はせて下さりませぬ歎ご、
 申す聲を聞き喜んで飛出した幼児と幼児を見て喜んだ婦人と母子の
 間に相互に何もいはずに只あしこのみで抱き付た有様、何とも比す
 べきものなき歡喜の溢れて有た、大僧正は婦人に向ひ今日まで捜索
 した心地はいかゞ有たごお尋ねなされたら、夜ごなく晝ごなく寐
 ても覺めても思ひ續けて御座いました、ご答へたごある、其時大僧
 正はあ、我往生は疑ひなしご御喜びなされた、何故婦人の答により
 て我往生に疑ひなしご申された歎といふに、三十年五十年娑婆に縁
 を結んだ母子でさへ、親の子を思ふ慈悲は晝夜の別なく夢幻の間も

思ひ續けたのである、子より尋ね出して母ではなひ、母より尋ね出した子である、今我等は無始已來の迷兒なるを思ひ續けて下さつた如來の大慈悲は、三十年や五十年の事ではなひ、十劫已來今日まで正覺大音響流十方呼び續けにて今は眼前に來て下さつたのであると感得なされた、意底が聲にあらはれて、あゝ我往生に疑ひなしと御喜びなされたのでありますまひ歎。

第九十九 我心を穿鑿するな

行者能信の味ひ所謂機受の思ひ振りを示したまふは、行者に代りての御化導である、敢て受心は斯様に思へよこの御差遣ではなひのである、本願名號の由れを聞いて疑ひ晴れ心は斯様なものであるぞこのたまふ御親切である、然るを誤りて能機を募り能信の方をのみ穿鑿し所信の方を忘るゝの傾きがある、困りたものと申さねばならぬ、

叩かれて痛きは必定であるから、叩かれた時いたしと思はるゝ歎、思はれぬ歎と我心を搜索するものはあるまひ、叩かれた儘が痛き事云ふに及ばぬ事である、されば助くるぞよの勅命を聞いて疑ひの晴れたのが、助けたまへの信心である、何ぞ煩はしく助けたまへの思ひがある歎なひ歎と我心を穿鑿するや無用の苦勞と申すべきである、一流に於ては參らせ心わろし只下され心をもつべしと先徳も御示しなされてある、清朗なる圓月をみて清くして丸ひ月と思はねばならぬと募る必要はなからふ、思はれぬ歎といへば思ふて居る、思ふて居やうと思ふて思ふ事に成たのではなひ、畢竟月が思はせたのである今も罪惡の我を助けたまふ本願と聞いて信じたのは信じたから助くる本願と成たのではなひ、本願の方が間違ひから間違なしと信ぜられたのである、助かりに出ることをやめて助けらるゝと安心いたし

ませふ

第壹百 疑ひなきといひて疑ふ種類

本願には疑ひありませぬけれども、此様な機では往生は出来まひと案じますと申す輩が少なくなひです、本願に疑ひなきものが此機ではといふは何事である、此機では往生出来まひと案じるなれば、未だ本願を信せざるのであらふ、大體阿彌陀如來の本願はいかなる機を助くるご仰せらるゝのであらふ、蓮如上人は勅命を和らげて阿彌陀如來の仰せられける様は「未代の凡夫罪業の我等たらんもの罪はいかほぞ深くとも、我を一心にたのまん衆生をば必ず救ふべしと仰せられたり」と懇示せられてあるでなひ歟、此機ではといふ案じのあるは罪業深重をいふのでありませふ、されば罪はいかほぞ深くとも勅命が出たら遠慮なく大悲の彌陀をたのむが宜しひてなひ歟、

元來疑ひありませぬといふのが偽りでありませふ、眞實信心決定したもののならば疑ひませぬと募る譯はあるまひと思ふ、恐ろしくなひくといふ聲は恐ろしひ心から出たと申してよからふ、眞に恐ろしくなひ時は恐ろしくなひといはぬばかりではなひ、心付かずは居るのである、墓原通行して恐ろしひ事がなひと氣の付た時が、はや恐ろしひ心が動ひて居るのである、疑はぬくご丁寧に繰返すのは心の底に案じ氣の動ひて居る證據であるまひ歟、墓原通行しても日中には恐ろしくなひといふ氣が付かなかつたのである、眞實信心の行者が光明の眞晝中に敢て疑はぬくご叫ぶ必要はなひであるまひ歟、又本願には毛頭疑ひをかける所なひけれども、今にも死なねばならぬのであると思ふご心細くなります、若し臨終に疑ひが起らねばよひがと案じますと申す一類がある、是亦信仰の目的違ひして居るの

である、此機を助けたまふ本願を信ぜず助ける、我の方思ひ心を信じて居るに違ひなひ、若し只今は喰ふて腹の脹る飯といふ事に疑ひなければ、年末に至りて喰ふても腹の脹るものならずといふ心が起らねばよひか案じるものありたら何と評しませふ、實に入らざる心配する痴漢といひませふ、本願に只今は疑ひなければ、臨終に疑ひが起らねばよひか案じる人は、右の痴漢の類である、兎に角己が機を繕ふ事は廢止に致しませふ、那邊より出掛ても畢竟浄土へは生るべからざる我機である、夫ぢやによりて我身の罪の深き事をば打すて、佛に任せまいらせてご仰せられるのである、我計度をやめて如來に計らはるゝが他力であるものを彼是後生を支配したのが大間違でありたご目をさまし「たゝたのため彌陀の誓ひの一筋を迷ひの道はそのままにして」。

第百壹 火吹き達磨

銅製にて火吹き達磨といふものあり水を入れて火側に置きますと火氣が達磨に移るとき、水が湧き出して達磨の口より風を吐く、吐た風が火を吹きませふ、吹かれた火が興りて火勢が強くなる、強く成た火勢によりて達磨体内の水ますゝ熱し熱するに隨て達磨の口の息き強くなり火を吹くといふ順序、面白き器械であります、かゝるものをみるに就て思ひ合はす節あるといふは、他の事ではなひ眞實信心の行者体内は冷へ切た凡夫なれども攝取の光明に照護せられて南無阿彌陀佛くご口より吹き出し、念々不捨者ご一聲く攝取照護の厚きを知りて、いよく稱へずに置けぬ事になり、稱ふるによりて益々歡喜の思ひを増長し、歡喜の湯の熱するに隨て稱名念佛やめられぬといふ順序、何ご有難ひではありませぬ歟、古への達磨は

九年面壁といふ剛のもので有たが、今の達磨は光明の火勢に體内の冷氣を暖め、他方の大氣焰を吐て煩惱即菩提の我等に知らせる善知識と成た、何と奇妙でありませぬ歟

第百貳

溝を浚へて水を通せよ

「埋れたる心の底を幾度かさらへて通せ法の眞清水」とは廣如上人の讀まれたる歌であるに聞た、是は蓮如上人が多屋内方の御文に、細々に信心の溝をさらへて彌陀の法水を流せといへるにありけに候、ごある意を詠せられたものと存じます、就是御文の上を一往伺ふてみねばなりませぬ「大畧信心を決定したまへるよしきこねたりめでたく本望これにすぐべからず」とある大畧の言はいかなる意であらふ歟、此語を御用ひに成た思召は二途あることであらふと思はる、先其一は百人の内七八十人を指すの意にて、他の一は一個人

の上にて於て骨髓に眞心徹到したる歟否は知れぬとも、陳述する言に間違なきものを指すの意である、斯様に二途に亘る語をもて確指點したまはぬものごみる所以は、決定したまへるよしきこねたごあるよしの二字である、何となれば直接に云ふ時の語にはよしごは申さぬが語例の様である、旅立を聞て其行途を壯にする書翰の文に近頃何國へ向て御發途のよしご記すのは、直接に本人より聞たのではなくして他より聞て而して贈る所の書翰故によしご記すのである、されば今も其語例によりて伺はねばならぬ、然れば大畧ごあるは一方に定めて指點したまひたのではなひ、二途を含んで汎爾ごして仰せられた事が明かである、さて斯様に申すごめでたく本望これにすぐべらずごある、御言が、太た譽め過た様に聞ゆるので不審が起る歟も知れませぬか、是は世間普通の言遣ひに習ひたまふのみ、世間

には往々此様の類語がありまして、それは結構であるを申す言にも拘はらず、不結構の事が多くあります、然れども敢て咎むる事はなしませぬ、今も其例にみるが宜しひです、餘り屁理屈云ふ事に偏するときは大畧信心を決定したるよききこねたるは本望之に過ぎなひが、十分信心を決定したるよききこねたるは本望にあらずと仰せられた様に解釋せねばならぬ事になる、却説次にその儘うちすて候へば信心もうせ候へしとある御言を、一往聽聞するときは、他力の信心は金剛堅固なればうせる筈なし、若しうせるものなれば自力信心ならん、大畧こは純他力ならで半他力を意味するのであるまひ歎といふ不審が起る、乃て順序を追ふて熟讀し思食を酌取違ひせぬ様致さねばならぬ、次に細々に信心の溝をさらへて彌陀の法水を流せといへることありげに候と仰せられた、彼のありげとは他にある事を

いふものにして、俗に左右ちやげなきいへる如しである、他とは聖道門なるや淨土門内なるや何れを指すのである歟、是も分らぬと前後通しませぬから定めて置ませぬ、是は淨土門内の異流を指したまふに違ひありませぬ、近く云はゞ決定したまへるよききこねたる本望これにすくべからず、不足はなひ様なれども、他に斯ふ云ふ事もある故油斷がならぬぞと餘所を借て直接指點なさらぬ、温和の御言遣であります、平凡のものは引立方が急なるため、引立る積りが却て引潰しとなる事が多ひものです、對手が述る領解を聞て、其述へたる言語上敢て失なきを天窓なら其は口ばかりで心は其如く成て居らぬのでなひ歟、心口各異てなひ歟と理屈を以て押し返すゆへ、徐々信仰の門に入り掛りたものでも、さてく六ヶしひもの哉と入口に降参し逃げ出す様の事になり易ひ、此邊は注意すべきであります

蓮如上人は直接に云はず本望これにすくべからずと與へて置て、さりながら餘所に斯ふ云ふ事もありげに候ごごやかに御教訓下されましたのであることを忘れずに御用ひ申さねばなりません。

第三百三 自利眞實心は疑ひを脱せぬ

多屋内方(二帖初通)の一通には、素人に不審の起る御言が多くありまして、前にも辯じた信心もうせ候へこの如き、又女人の身はいかに眞實心になりたりといふことも疑ひの心は深くしてとある如き、最も目立たた所であります、依て今不審の晴る様、思召を伺ふてみませふ、總て文章といふものは段落がありますから、一續けにせず段落のある所は判然と區域を分けてみねばなりません、今此御文の上も左様である、抑もより穴賢まで一續けに伺ふご高意を誤ることになりません、乃で今はいかゞ段落が付てあるぞと申せば「それに付て

女人の身は」といふより「さらにうせがたくおぼゆ候」といふまでが一の段落にて「ここに在家の身は」といふより「あさましといふもおろかなり」といふまでが又一段となるのである、斯様に分れば不審は容易に晴る、筈である、元來眞實心とは他力信心と定め、疑心なきの名目と心得た上より段落も分けずにみる故、眞實心になりたりといふことも疑ひの心は深くしてうせ難ひとあるのに不審が起るのであります、然るに右の如く段落を分けて、ここに在家の身はといふ次の段と、それについて女人の身はといふ前の段とを區域を分けて出家在家の両段とすれば、不審なく明了になるのである、されば女人の出家は尼僧といふ事が定まる、尼に成たはいかなる因縁なりやと質すべき順序になる、先一例をいはゞ二世をも契りた夫は頓死して果敢なくなりた、實にたのみなき憂世であると厭世の情を起

し、再縁を企てぬのみならず、一子たも未だ擧げざるを幸ひと爲し世を思ひ却て除髮染衣の尼僧となり、人里離れた山の麓に僅に膝を容るゝばかりの草菴を結び、西に向ふて端坐合掌し晝夜念佛三昧の身と成たのである、是等の人を眞實心になりたと申すのである、如是世塵を避けて草庵に獨居する身の、百事を擲ちて念佛三昧と成たら往生いかゞの二の足履ます、安心決定して居る筈なれども、注文通り行かぬもので、世塵を避けても、草庵に獨居しても、往生いかゞの疑心は去りませぬのである、世人が出来心の尼成り遠からず丸鬚に復歸するたらふなご、冷評するを耳にすれば嬉しくは感じませぬ、思まゝしひと歎悔しひと歎思ふ心は去らぬのである、此實況を「女人の身はいかに眞實心になりたりといふことも疑ひの心は深くして又物なんこのいまはしく思ふ心はさらにうせがたく覺ゆ候」と

仰せられましたのであらふと伺ひます、此所で出家の段落片付き次に在家の段に移りて「ここに在家の身は世路につけ又子孫なんこのことによそへてもたゞ今生にのみふけりてこれほごにはや目にみねてあだなる人間界の老少不定のさかひとしりながら只今三途八難にしづまんことをば露塵程も心にかけてずしていたづらにあかしくらすはこれつねの人の習ひなりあさましといふもおろかなり」と仰せられたのである、是等の御言も一往聞くときは、世渡りに關係を離れよこの意をもて御教訓なさる様にみゆれども、決して左様ではなひ今生にのみふけりて」とある、のみといふはばかりといふに同じ言葉にして、今生ばかりに耽りて後生を知らざるをお戒め下さるので後生を大事に思ひ佛法を尊ぶと思ふ心あれば世をすつるに及ばず、家を離るゝに及ばず、商ひをもし奉公をもし世の生活は分に随ひ進

行しながら、更に差支なき様に成てあるのが眞宗の宗義である、故に次の段に至りて「これによりて一心一向に彌陀一佛の悲願に歸して深くたのみたてまつりてもろゝの雜行を修する心をすて又諸神諸佛に追從申す心をもみなうちすて、」等とありて、世路を離れよの御言はありませぬ、されば世路を渡り子孫を愛育しながら信じ稱ふるここの出来る本願名號であること、安心なさるゝが宜しふ御座います。

第四百四 御恩報謝の務め心

「彌陀大悲の誓願をふかく信ぜんひとはみなねてもさめてもへたてなく南無阿彌陀佛をとなふべし」と和讃に御述へなされてあり、かくの如く決定しての上には「ねてもさめても命のあらん限りは稱名念佛すべきものなり」と御文に御示しなされてあれば、佛に向ふ御恩

報謝の務めは稱名念佛のみである、又宗祖大師に向ふ時の務め心は三種あることを、蓮如上人が御差圖なされてあります、其御差圖とは、一に信心決定する事、二に悪心を翻へして善心になる事、三に念佛相續する事である、第一の事は三帖目御明月の御文に、未安心の人にも速かに本願眞實の他方信心を取て、我身の今度の報土往生を決定せしめんこそまことに聖人報恩謝徳の懇志に相叶ふべけれ」とある、是が信心決定するをもて報恩謝徳と爲したまふ事明了と申すべきである、第二の事は同く引續て、これによりて年月日ころ我心のわるき迷心をひるがへして忽ちに本願一實の他方信心にもごづかんな人は眞實に聖人の御意に相叶ふべしこれしかしながら今日聖人の報恩謝徳の御こゝろさしにも相そなはりつきべものなり」とある、是が悪心を翻へして善心に基くのを、報恩謝徳と爲したまふ事明か

なりと申すへきてある、第三の事は其文一二に止まらねども、其隨一を擧れば四帖六通に「しかるあひだ毎年七晝夜の間にて念佛勤行こらしはげます是すなはち眞實信心の行者繁昌せしむる由へなりまことにこれ念佛得堅固の時節到來といひつべきもの歟」とある是なり、其他六ヶ條八ヶ條等此三種の事は明了であります、造花の如き信心者は稱名念佛を嫌ふて一向香ひ氣なしに居ります、稱へ様ご心掛るは自力なり、心掛ずにおのづから出るが他力なりといひ募りて居りますが、今の念佛勤行こらしはげます、これすなはち眞實信心の行者繁昌せしむる由へなりの蓮如上人の御教訓は何と聞くのでありませふ、こにもかくにも御恩報謝は眞實信心の行者ならねば勤め兼るは必定であります。

第百五 能書きの如く功を見せよ

四辻に立て往き來の人に藥を賣付るものがあります、口に泡を吹きつゝ賣る所の藥の功能を誇る、固より山師的のものでありませふけれども、出血を止むるに奇妙なるをみだまへといひながら、自身の腕を刀にて切て疵を付け血の滴るヶ所へ藥を塗るに、立所に出血を止めるものから輕蔑した者までが此所へ一包呉れよと購求する心になる、他人を教化し指導する職にあるもの、宜く省慮すべき事である、口のみ道に道を説て自身の形に其道を行はずんば山師的賣藥者のそれにも及ばぬ事であるまひ歟。

第百六 勇氣は信心より生ず

佛法といへば老耄したる者の耳慰め位に思ふて居たのが、青年輩に多かつたは大なる誤りである、其誤解させたは先進の信徒の誤解が手本と成て居たに相違なひ、兎に角誤解を破りて貫ひ度ものである

金剛の真心を獲得するは横に五趣八難の道を超へ、現生に十種の益を得ること、宗祖大師も信巻に御釋なされてある、信心を決定したものが泣聲で念佛して居らねばならぬといふ様な事はなほ道理である、まひ歎、勇壯活潑に世の中を動かねばならぬ否動かるゝのである、彼徳川家康公をみたまへ始めは累戦毎争敗北のみで有たが、或日三河大樹寺登譽上人の許に逃げ込まれた事があり、敵に圍まれた他に術なし、敵に殺されては祖先に面目なき次第なれば、切腹して祖先の墓前に終らんと欲ふ、墓所に案内を請ふと申されたら、登譽上人は死んで何の用があります歎、全體貴方が戦争なさるゝ心底太だ善くなひ天の冥罰を蒙りて敗北するならむ、敵を亡して領地を得たひ勝利を得て子孫を安樂にせんなど、自分勝手の強慾ばかり、其れで勝利は得られませぬから切腹して死んだ積りで改心し、生れ替りた

身で戦争なされ、然るときは必ず勝利あるべしと、懇々諭された、乃て家康は死んだ積りで改心し、生れ替りた身となるはいかゞの手段を取るの歎と御尋になりた、上人答ふる様に今日の世は上天皇陛下の宸襟を惱ましたまふ所、下萬民は塗炭の苦に叫ぶのである故、上大御心を安んじたてまつり、下塗炭の苦に叫ぶ者を救はんといふ慈悲心より、不惜身命に戦争なされ、何時身命は僵れても如來の救助によりて來世得脱なるを樂み、自他共に獎勵なさるべし、必ず大勝利を得んご佛願の勝益を説かれた時、安心立命せられ、上人より南無彌陀佛の六字の旗と厭離穢土忻求淨土の旗と合三旋の旗を得て、勇進なされたのが勝利の始まりで有た、勇氣は全く信心より生じたのである、信心は金剛堅固であるもの泣き沈む様な意氣地なきものではなほ、家康公は頭に一寸八分の彌陀の尊像を收め、口

に常に稱名念佛すること戦争中さへ日々三萬遍を怠らなかつたお
ります、泣聲念佛でなひことは必定である、金剛堅固の信者は彌陀
の心光中に照護せられ、永く生死を隔て、頂たのであるもの愉快千
萬であるまひ歟、憶念稱名いさみあるこの御言に徴してみても知れ
ませふ。

第百七

念佛の團子に心猿を懐けよ

猿は人真似をする獣であります、山中の民家にありては家人の留守
中猿が入り來りて爐火を弄び失火することもあり、或は幼兒に浴湯
させること熱湯に殺したといふ様な事も聞きました皆是人真似する
所より誤るのであらふと思ひます、某紳士が夫婦連で婢僕を従へ或
る山に遊びたるに、彼地此地徜徉する間に脱で置た帽子がみゆなく
なつた、主従悉く搜索に係りたが分らなひ、是非なく歸途に就かん

ごせしに後方に猿聲が聞けたので、顧みれば紳士の帽子を頭に被つ
たり脱だりして居る、それとみるより樹下に立歸り主従共に石を投
るやら杖を銃に擬して威嚇するやら、種々の手段を施せごも一も功
なしといふ有様、殆ど工夫に盡て歸途に向はんとする時、一人の村
夫その様子をみて氣の毒に思ひ、一工夫あります御待なされといひ
ながら猿が居る樹下に坐を占め腰より一の竹皮包を擴げ、團子を喰
ひに掛りました、之を樹上から見たる猿は團子が羨ましくまして追
々高き枝より低き枝へ下りて來ました、已に一の枝まで來た時に村
夫は竹の皮にある團子の總てを猿に向つて投げました猿は両手を以
て團子を受ること持て居た帽子を、己れ忘れて離しましたとある離
し兼た帽子の手から落る様に成たは團子を與へたのに由るのである
今も名利をすてよ、勝他をはなれよと申しても、樹上の心猿はいよ

く離はなしませぬ、乃すなはて南無阿彌陀佛なむあみだぶつくご無我むがに稱なへて喜よろこびつゝ、世よを渡わたり行くをみますよこの様のやうにうまい味あじのある念佛ねんぶつであらふ歎あそろくく謗そしりた人ひとまでが高たかき自力じりきの枝えだを降くだりて來くる様やうになり、終つひに不思議ふしぎであるなご稱なへてみる氣きになるごき、自然しぜん名利みやうり我慢がまんの帽子ぼうしを落おすことになり、念佛ねんぶつの團子だんごを喰くふてみせるに如しくはありませぬ、何なんご善よひ工夫くわうで御座ございませふ。

第百八 時無別體依法而立

大乘だいじやうよりいふごきは萬法唯心ばんぽうただしんで細論さいろんせぬけれごも、小乘しょうじやうでは俱舍くしゃに一刹那せつなの短たんと極微ごくびの小せうを對句たいくに致いたします、時じごいふは五境中ごきやうちゆうの聲こゑの如ごとく色形しきけいのなひものなれごも、一刹那せつなも積つめば一秒びやうとなり一秒びやうを積つめば一分ぶんとなり一分ぶんを積つめば一時じ……一日いちにち……一月いっげつ……一年いっねん……十年じゅうねん……百年ひゃくねん……千年せんねん……一劫いっせき……十劫じゅうせき……ごなるものである、さ

て其時そのときを積つだ一年いっねんを追想つひまうし一月いっげつ一日いちにちより十二月三十一日じふにがつさんじゅういちにちまで、いかなる法ほふに依よつて成立せいりつしたるや考かんがへてみませふ、否いな考かんがふるまでもなひ名みやう聞きに非あらざれば利養りやう、貪欲こんよくに非あらざれば瞋恚しんみ、何なに一つ取上とりあげ他人たにんに吹聴ふいしやうの出來できることはありますまひ、笑わらふたも名利みやうりに達たつした時ときであらふ、悲かなんだも榮譽おんりやうを失うした時ときであらふ、事々物々じざぶつざぶつみな如是かくのごとしいほねばならぬ、是こゝは世間せけんに就つて名利等みやうりとうに相應さうおうする邊へんをもていふのみである、眼めを轉てんして出世間しゅつせけんに就つていふてみませう、何地いどこでも佛法ぶつぽふ繁昌はんじやうと呼ばる寺てらも多く、隨したがつて僧侶そうりよも多おほき所程ところほど無道德むたく不品行ふひんぎやうのものが多おほひ様な心こゝろ地ちがする、實じつに慚愧ざんきすべきことであるまひ歎なげ、往生わうじやう要集やうじつに大集經だいじつぎやうを引ひいて利養りやうの害がいを擧あげ、又また佛藏經ぶつざうぎやうを引ひいて戒いめてありますが、其文そのぶんに迦か葉佛記やうぶつぎして釋迦牟尼佛しやくかむにぶつ多く供養くやうを受うく、故ゆゑに法當ほふまさに疾せく滅めつすへしこと云いふ、如來にょらい尙爾なほしかり何なんに況いはんや凡夫ぼんぷをや、大象窓だいじやうまどを出いづ遂つひに一尾いびの爲ために碍さ

へらるゝ行人家を出づ遂に名利の爲に縛せらるゝ、則知る出離最後の怨名利より大なるものなきなり、但淨名大士身は家に在り心は家を出づ、藥王本事は塵寰を避け雲山に居ず、今世の行人亦應に是の如くなるべし、自ら拙性を料りて之を進止せよ、若し其心を制すること能はずば猶須く其地を避くべしとあり、迦葉佛は過去七佛の隨一にて即釋迦の前佛であります、其佛の懸記に右の如く説きたまふてあるのです、何と慚汗の背に流るゝ事でありませぬ歎、せめて靈受信施の一點たりとも慎み度事で御座います。

第百九 御慈悲の絲が切れぬ

時無別體の下で述べました如く、一々我々の慚死するも足らざる事のみなれども、佛恩報謝の稱名相續しつゝ來たる身に取ては喜ぶべき事涯りなひのである、何とならば名利の絲をもて繋ぎたる世間珠

數は、貪欲瞋恚等の煩惱王にて玉は大なれども續かずに切れくなり、御恩報謝の出世間即佛法珠數は歡喜の玉小なれども御慈悲の絲が相續して切れませぬ故、憶念の心つねにして佛恩報ずるおもひあり、ご仰せられてあります、いかほど大切にすることも繋がる玉は失ひ易き道理であります、然れば名利勝他貪瞋等は畢竟散失するものである嬉しひことであるまひ歎、恒願一切臨終時勝緣勝境悉現前ご善導大師も仰せられてあれば一年の年越は一年の臨終、我等の臨終は一生の年越である、刹那積りての一生は惡を積りて惡の年越せんよりは、日出度年越致し度事である、斯くいへばさて臨終の來迎を期せよと申すのではなひ、死相の惡を嫌ふのでもなひ、只是一流の御勧めは平生業成の宗義なるもへ、聞名信喜の一念に攝取光中の身となるものにて、善惡は業感に任すのみ、されども是は安心の沙

汰の上にある事若し相續上よりいへば放逸無慚を慎むは勿論、ます
稱名相續して美しく過さねばならぬのであります。

第一百十 信心に御慰み候

わが心に任せずして心をせめよ、佛法は心をつまるものかとおもへば信心に御なくさみ候ごは、蓮如上人の御一代聞書にある御言である、是は禮讚前序の仰き願はくば一切往生人等、善く自ら己が能を思量せよ、今身彼國に生せんご願する者、行住坐臥必須く心を勵まし己を尅し晝夜廢すること莫るべし、畢命を期ご爲し上一形に在りて少く苦きが如くなるも、前念命終すれば後念に即ち彼國に生す長時永劫常に無爲法樂を受く乃至成佛まで生死を経ず豈快からずや」
ごあるによりたまふ事であらふご思ふ今御一代聞書の方へ配合して伺ふてみませふ、心を勵まし己を尅しごは、こゝろをせめよこのた

まへる語の源である、せめよごある御言は苦しく聞めれごも、次に直に佛法は心をつまるものかとおもへば、信心に御なくさみ候ご仰せられてあるので、縮まつた心が伸る様である、此にももの歎ごある歎の字に味ひある様です、上一形に在て少く苦きが如くなるも前念に命終し後念に彼國に即生す乃至快かすやご承けたまふのが御なくさみ候の御語である、禮讚の方は當來の益なれごも、宗祖大師は愚禿鈔に前終命終は本願信受後念即生は即得往生ご釋せられて現益にしたまへり、蓮如上人は宗祖の指揮によりて禮讚をみたまひ、二行半の文八十餘字の假名書に爲したまふのであります。

第一百十一 野菜翁ご善知識

野菜作りの翁ありて熱心に各種の野菜を作り居る、第一我家邊より隣村の畠、遠くは他郡にまで多くの菜園を所持し、一人の手にては

回り盡せぬによりて、各所に各人をして代理せしめて居る、肥料の加減や地味の厚薄により、出来不出来は一様でなひけれども、肥料に負けて變色したと憂る所もあれば一方には意外の上作をみたと喜ぶ所もある、平均上月一月年一年に成蹟宜しひと、翁は鼓腹の樂みを爲しつゝあり、之を我法義上に取來りて申してみませふ野菜翁は善知識である、野菜は御門徒である、代理人とは門末の僧侶である、家邊の野菜とは本山御手許の御門徒である、隣村或は他郡にある菜園とは各國遠近に散在せる所の御門徒である、何れも御法の雨露に沾ほひ、信心の根を深ふして日夜南無阿彌陀佛くご相續の色よく榮ふは最も善知識の御喜びなざるゝ事であるが、中には現世祈禱に心ありし人を嚴しく破斥した爲め、肥料に負けて變色した菜の如く足を遠くしたる同行もある、又一方には二諦相依の實行が他人

を導く強引力と成て、代理人まで待たず無言の教師たる同行が殖たごいふ場所も出来たごいふ仕合、畢竟平均上では年々非常の進歩をみるなれば、敢て不足の言を並ぶる必要なしごいふ道理である。

第百十二 有るべき様にあれ

或人が世の中安穩に渡る道筋を明惠上人に御尋ね申したら有るべき様にあれと答へられたごいふ事を聞きまゐた、いかにも面白ひ事である、世の中の總てが有るべき様にありさへすれば實に安穩である天子は天子の有るべき様、大臣は大臣の有るべき様……家庭に於ても親は親の有るべき様、子は子の有るべき様、夫婦は夫婦の有るべき様、兄弟は兄弟の有るべき様、朋友も僕婢も皆是有るべき様にならぬ所がら不安不穩の事になるのである、未來に就ても凡夫は凡夫の有るべき様は落る機であるから落る機ご知り、佛は我等を救ふ御

慈悲をもて勅命を下したまふ故、救ふて下さるまゝに任すが有るべき様に成たのである。

第百十三 他力信心は公債の如し

甲乙丙三人の者が家産を子に譲るに當りて甲は裸金壹萬圓を子に渡した、乙は壹萬圓を封金にて渡し死ぬるまで使用する勿れと命じた、丙は壹萬圓の公債を渡した甲者の悴は壹萬圓を受取て自由に使用した所から終りを全ふしなかつた、乙者の悴は壹萬圓を受取りつゝ死ぬるまで使用の出来ぬ封金故譲與せられた甲斐なしで有た、丙者の悴は公債にて受取たゆへ年々五百圓の利子を得て使用を便にし元金は抽籤當りの時手に入るといふ樂みがあつた、此事を安心立命の上配してみれば、裸金にて受取る心は定散心である、封金にて受取る心は放逸無慚の者の心に當ります、何となれば信心頂くとも悟

りを開くは彼世にあり、今世は相變らぬ凡夫信前信後に差別はなひ欲も當然怒りも至當といふ風に流れて、眞の行者にあらざるゆへ十種の益なきは勿論、寸分の現益なき不幸者である、公債にて受取る心は他力廻向の信心南無阿彌陀佛は此世にて使用するものにあらず此元金は無常の籤の當りた時、滅度の正金を受取るの約なれども年々利子の下附ある如く、現生に十種の益の利子が手に入り荒くものも申すまじきなり、又は悪心をひるがへして善心になりかへる、又は他を誘引して佛道に入る、みな是御廻向の信心の公債利子であります、一萬圓の公債は元金に定まりがある故、利子も五百圓といふ限りがある、信心の公債は一萬圓や十萬圓の際限なく、不可稱不可説不可思議の大功德故、年に二度の利子受取てはなひ、時々尅々何時何處でも受取らるゝのである、ねてもさめてもへだてなく南無阿

勸學小山慈榮師題字 西應寺勝山善巧師述

(總平かな侍) 表裝美麗

二論 正信偈百席談

全貳冊

實價五十錢 郵稅八錢

古來正信偈に説て談録多ありと雖も或は義理に偏し或は俗談に流れ未だ其中を得たる者なき内地雜居の今日に於て事實相違せる妄誕不稽なる天竺話の怪奇因縁を説き却て其信仰を失せしむるに至ては遺憾千萬也然るに本書は當時教界に有名なる西應寺善巧師が諸大家の講説に基き能く義理を極め蘊奥を盡し席を一百に分ち毎席時勢に適切せる最新なる譬喩因縁を加へ眞俗二諦に涉り誰人も了解し得べき様辨述されたる古今未曾有の良書なれば苟本宗に流を汲むの諸彦一日も缺くべからざる書也
大内青檀居士演譯 安藤正純師和解 (總假名附)

淨土妙典三部經譯解

極美製 全一冊

菊版 二百八十五頁

實價五十錢 郵稅六錢

淨土三部經は淨土門正依の本經にして彌陀淨教の極致他方易行の玄旨此中に窮盡して餘す所なき此故に其名號の法味を愛樂し現當二世の勝益を受けんと願ふものは此三經に由て具に其玄底を叩かざるべからず然れども自己の愚見に任じて恣に之を涉獵せんか佛祖の眞意を認るの虞あり之に由て古來之が註解講録にして世に行はるゝ者少からずと雖惜哉用語難雜議論復雜專門の佛學者に便なれども世上一般を益することなし爰に於て平易通俗に三經の玄旨を領し淨土門内外の人をして淨土門の大要を知了せしめんことを佛門の泰斗大内青檀居士に乞ふてこれに演譯を爲し淨土門の大家安藤正純師を煩はして佛門の泰斗大内青檀居士に乞ふてこれに演譯を爲し淨土門の大家安藤正純師を煩はんとせらるゝ人が和解を施したるものなれば苟も佛敎の門に遊んで醍醐の法味を味はんとせらるゝ人は一日も坐右に缺く可からざる良書なり

大洲鐵然師題字 西應寺勝山善巧師述

三版發行

二論 眞俗御傳鈔百席談

石版表裝美本全貳冊
實價金五拾錢
郵稅金八錢

此御傳鈔一部十五段、第三代覺如宗主が拜誦するを得るは實に覺如宗主の賜なり、然れども其文簡短にして容易に其深意を伺ふこと能はず然るる従來本鈔に就ての談録夥多ありと雖も或は簡短に失し一往の文句釋に止り、冗長に流れ往々事實の眞相を誤るもあり甚難も或は牽強附會なる臆説を交へ遂に宗意を害するも、本書は眞に正信偈百席談の著者西應寺善巧師が内外の教典を涉獵し覺如宗主の本旨に基き聖人御一代の御化導は一として自行化事實精確も現今の時勢に適合せる、斬新なる他の外ならざること等師が達識を以て、事實精確も現今の時勢に適合せる、斬新なる因縁を、眞俗二諦に涉り誰人にも了解し易く、古今獨歩の一大珍書なり、苟も本宗に流交へ祖徳の萬一を知る玉へ

龍樹章說教

定價 金貳拾六錢
郵稅 金四錢

本書は眞に淨土和讃二首説教を著し大に世に高評を博せられたる東保願專寺神子上惠了師が今回更に高僧和讃龍樹章十首を讀題として卷を上下に分ち爽快なる雄辯を以て誰人にも了解し易く譬喩因縁を交へ道歌等を引用し懇切に辯明せられたる良書なり

勸學小山憲榮師序文 赤松連城師題字 搦月政臣師著述

明治

三世因果證據錄

全五冊 定價 金六拾錢 郵稅 金八錢

○神道より佛道を難す○佛道より神道反難す○神道の綱を辨す○神道所立の後生を辨す○廣く俗難を擧て是を破す○三世因果生死輪廻の說○人は必ず前生ありと云ふ證據を辨す○人は必ず後生ありと云ふ證據を示す○地獄極樂實験の例證○神儒佛三道の同異勝劣を辨す○善惡の標準を辨す○善惡種類を辨す○十惡の業報を辨す

赤松連城師序文 赤松皆恩師訂正

日本往生全傳

全六冊 定價金六拾五錢 郵稅金八錢
○日本往生極樂記慶保胤換○續本朝往生傳黃門侍郎匡房撰○拾遺往生傳三善爲○康記○後拾遺往生傳
○本朝新修往生傳藤宗友撰
○人道佛敎倫理の初步
全一冊 一部金六錢郵稅金貳錢 十部以上一部五錢割

現世利益辨

栗津義圭師述 全三冊 定價金參拾五錢 郵稅金八錢
○心光照護の說○大興寺の本尊○易の說○傳○災の說○釋尊の壽量○長命安樂の說○息災の說○信心の食あるの說○吉凶の說○命の說○貧者は得ざるの說○太神宮御本地鎮聚の說○和光同塵の說○善量師の事○護國念佛鏡の文法儀○罰あたりの辨

西光寺中谷淨林師述 一名大原舌戰談

大原舌戰談

定價金貳拾六錢 郵稅金四錢

本書は本宗に於て尤も大切なる開宗立敎の問答と云へき聖道淨土の勝劣自力他力の詳論一々皆廢立の所談にわたり問答の結果諸山の碩學の大徳も終に本宗の殊數を切り念佛門に入り聖人の弟子となられたる事蹟の大要を淨林師が尤も時勢に適合せる嶄新なる譬喩因縁を交へ精密に辨述せし書なれば本宗有縁の徒は必讀あらんことを乞
勸學松島善師校閱並題字
西光寺中谷淨林師述 附録忠死軍人追弔の真意

女子の鑑

定價金貳拾錢 郵稅金四錢

中陰年回の佛事に際し是が勝縁に値遇せる親戚遺族に對し布敎の必要尤肝要ならんとす是に於て中谷淨林師通俗平易を旨とし淨土見聞集及び十王經等に依りて追吊は死者に對し生存者の爲すべき重要な義務人道の大本たることを精密に辯せられたり殊に本書は勸學松島善師校閱の勞を乞しものなれば本宗に流を汲まるゝ諸彦の必讀すべき良書也
高橋瀧尾 佛敎女子の鑑 全 定價金拾貳錢郵稅金貳錢
女史著 德育女子の鑑 全 定價金拾貳錢郵稅金貳錢
本邦婦徳の美其の淵源遠し之を繼承し之を發揮するは今日婦子女たる者の任務なり之を涵養し之を發揮し以て貞淑賢良の婦女を養成し雄大忠誠なる國民の慈母たらんこと是れ佛敎徳育婦女の鑑の主張する所なり

安藝菅瀬徹照師述

全三冊



紙數七百有餘頁
石版表紙美本
定價金八拾錢郵
税金拾錢
特別割引金七拾
錢郵税拾錢

本書發行以來非常なる好評を得初版賣切れ一回發行す

高祖聖人の事跡に付ては小説的の傳記種々ありと雖も未だ通俗平易を主とし言文一致を以て説教體に辨したる書籍なり本書は先きに蓮如上人一代記説教を著して大に好評を博せられたる徹照師が獨得の滑稽流暢の辨を以て聖人諸傳記の内より英を摘み華を拾ひ聖人御一代御化導の御苦勞に付き譬喩因縁和歌を交へ如何なる婦女子たりと雖も了解易き様詳細に實地説教せられしものなれば本宗有縁の諸彦熟讀し高祖の洪恩を讃歎し以て法味愛業の助縁となされん事を乞

●蓮如上人御一代記説教

菅瀬徹照師述 全一冊

正價金廿五錢
郵税金六錢

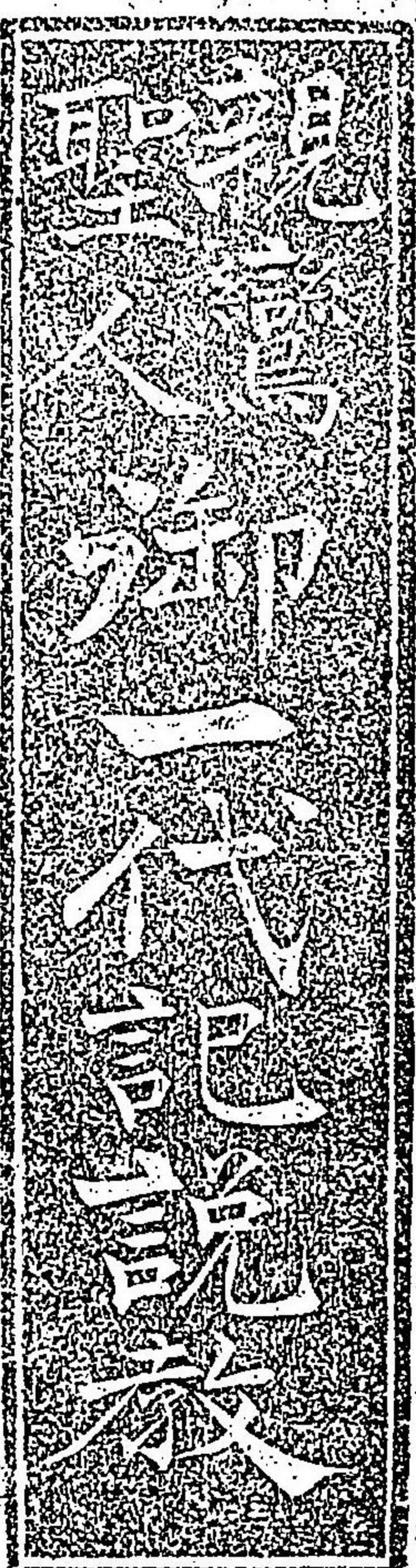
●蓮如上人御奇蹟説教

同 師 著

定價金貳拾錢
郵税金四錢

安藝菅瀬徹照師述

全三冊



紙數七百有餘頁
石版表紙美本
定價金八拾錢郵
税金拾錢本月中
特別割引金七拾
錢郵税拾錢

本書發行以來非常なる好評を得初版賣切れ二回發行す

高祖聖人の事跡に付ては小説的の傳記種々ありと雖も未だ通俗平易を主とし言文一致を以て説教體に辨したる書籍なり本書は先きに蓮如上人一代記説教を著して大に好評を博せられたる徹照師が獨得の滑稽流暢の辨を以て聖人諸傳記の内より英を摘み華を拾ひ聖人御一代御化導の御苦勞に付き譬喩因縁和歌を交へ如何なる婦女子たりと雖も了解易き様詳細に實地説教せられしものなれば本宗有縁の諸彦熟讀し高祖の洪恩を讃歎し以て法味愛業の助縁となされん事を乞

●蓮如上人御一代記説教

菅瀬徹照師述 全一冊

正價金廿五錢
郵税金六錢

●蓮如上人御奇蹟説教

同 師 著

定價金貳拾錢
郵税金四錢

西光寺中谷淨林師述 一名大原舌戰談

新案活用

大原舌戰談

定價金貳拾六錢
郵税金四錢

本書は本宗に於て尤も大切なる開宗立教の問答と云へき聖道淨土の勝劣自力他力の評論一々皆廢立の所談にわたり問答の結果諸山の碩學の大徳も終に本宗の珠數を切り念佛門に入り聖人の弟子となりたる事蹟の大要を淨林師が尤も時勢に適合せる斬新なる譬喩因縁を交へ精密に辨述せし書なれば本宗有縁の徒は必讀あらんことを乞

新案應用

中陰年間談教

定價金貳拾錢
郵税金四錢

中陰年間の佛事に際し是が勝縁に値遇せる親戚遺族に對し布教の必要尤肝要ならんことを是に於て中谷淨林師通俗平易を旨とし淨土見聞集及び十王經等に依りて追吊は死者に對し生存者の爲すべき重要なる義務人道の大本たるを精密に辯ぜられたり殊に本書は勸學松島善海師校閱の勞を乞しものなれば本宗に流を汲まる、諸彦の必讀すべき良書也

釋仰誓●僧純●衆玉師合著

再版 妙好人傳

假綴全二冊實價貳拾四錢郵稅六錢
善人の敵となることも悪人と交るなかれと古人の格言あり是れ凡情の遷り易きが故に所對の物柄を撰べとなり茲に百數十人の妙好人上人々人最勝人稀有人とも云はれたる嘉言善行をなしたる人々を彙め以て妙好人傳と名け従來出版ありしを訂正再版せし者なり

妙好人 清九郎實傳

實價拾貳錢 郵稅貳錢
本書は有名なる清九郎同行存生中信前信後に亘り逐一行爲を詳載せし平假名繪入にして最も解し易き者なれば實に本宗信徒の龜鑑として是非一讀を要すべき良書なり

親鸞聖人御舊跡

廿四輩順拜圖繪

全二冊 實價參拾錢 郵稅八錢

小泉了諦師序 日下密門師編

筑前國 妙好人 長幼郎實傳

實價六錢 郵稅貳錢
氏は同地萬行寺和上の教化を受けし實に稀なる篤信家にて本宗信徒の模範として耻ぢざる明治の妙好人なり乞ふ一讀ありて氏の性行を追慕し玉へ
大法主殿御詠歌 赤松運城師拜寫
小野島法藏師編

婦人のかくみ

實價六錢 郵稅貳錢
本書は有名なる勤王家吉田松陰先生母堂杉瀧子令妹楫取久子の傳記にして孰れも深く本宗に歸し只管念報相續に怠りなく常に他人を誘導して同く一味の安心に住せしむるを無限の快樂となせり實に眞俗兩全の功を奏せられたれば我同胞姉妹の模範たるべきものにして殊に母堂瀧子の如きは悉なくも 皇后陛下より褒賞として金圓物品を賜はり加之逝去の際大法主殿より追弔の爲め賜りし御詠并に品川子爵の書翰令妹久子の遺書等に至る迄餘さず記載せしものなれば荷も我同胞姉妹は龜鑑として一日も座右に缺くべからざる良書なり

宗祖大師六百五十年忌紀念出版
 勸學利并鮮妙師校閱並題字 釋立智師謹校
 司教是山惠覺師校閱並序 司教忍涌僧梁師跋

聖訓御傳謝慶記

特別減價金五拾錢郵稅金拾錢

全 石版表紙美本
 二 定價金六拾錢
 冊 郵稅金拾錢

親覺聖人の信念行動は則ち活ける真宗なり苟も真宗を知らんと欲せば聖人を知悉するに如くなし御傳二卷は實に聖人を知るの尊書なり然るに本書の註釋古來頗る多しと雖も往々事實の真相を誤りたるもの多しとせしむるは御傳に系譜や故實を悉くし事實の考証と詳にせしむるは他に比類なき宗祖六百五十年の忌辰も目焦の間迫りなり是に於て聖人の偉徳を叙述せし確實なる傳記の出版今日に於て最も必要の微意を御諒察の上續々御申込を乞ふ

發行所 京都市油小路花屋町上ル 振替貯金口座四貳壹五番 顯道書院

宗教報國談第三編 諸大家說教 定價 金貳拾貳錢 郵稅 金四錢

新直論の同演達 〇戰死者追用會說教 〇時居と慈善會に就て 〇戰時道德 〇新入營者教誨 〇大國民の態度 〇佛敎と戰争 〇戰時說教 〇戰死軍人追用會 〇眞體 〇傷病兵士の慰め 〇念佛と萬歳 〇佛敎軍人 〇戰時と婦人會 〇勝利と恤兵 〇兵士の信念 〇念佛と進軍 〇念佛と戦死 〇念佛突貫 〇念佛の功徳 〇從軍布敎師の通信 〇決死信仰談 〇出征兵士に與へる書 〇兵士の喜び 〇戒名を所持して戰死 〇勳章を帶たる白骨 〇追弔唱歌 〇追悼和歌 〇追弔弔詞 〇祭文 〇戦争に於ける宗敎の功果其他數種

中谷淨林師說教 新選 活用 自問自答章說教 定價 金貳拾六錢 郵稅 金四錢

第一章說聽方軌 〇第二章問答規則 〇第三章當文來由 〇第四章平生業成 〇第五章來迎不來迎 〇第六章正定滅度 〇第七章信具不具 〇第八章信後稱名席數 〇四十二席 〇寺院 〇病院 〇入院患者 〇寺院參詣 〇說誨師 〇院長 〇院長診察 〇病人物語 〇安心問答 〇苦悶中の患者 〇安心決定者 〇全快者退院 〇退院後の心得 〇信後相續 〇平素の衛生 〇看護の必要 〇著者は先に三位十兩辨の席に於て學校組織の譬喩に依り大に高評を博せられしか今回は全部病院組織の譬喩を以て嶄新適當なる譬喩因縁及滑稽談を交へ懇切に辨述せられたる他に比類を見ざる良書あり

結城清壽師 柳澤天心師編 布敎譬喩合法一口辨 定價 金貳拾五錢 郵稅 金四錢

譬喩因縁を應用し其の意を了解せしむるは必要でありませしが長談の譬喩に至ては其の寓意の何れにあるやも闕取難き話も亦多く有りませす本書は安心報謝俗諦の部類に付き譬喩を合法し至極短辯に面白く辯じたる事は本書の特色であります

醍醐侯爵題字 足立栗園居士著

通俗日本佛教史

再版菊判全一冊定價參拾錢郵稅六錢
 本書は今を去る千三百有餘年前に於て我國に渡來せし佛教が能く國狀に適し國民を導き國運を進め以て今日に到りし迄の佛教事跡を詳細に叙述し時世の要求國民の希望に應じて救世の本願を發揮したる我佛教各宗の興起傳統をも明かにせしものあり統分つと五曰傳來の代、興起の代、隆盛の代、進軍の代、遵奉の代、順序整然として一讀の下佛敎史の大意を了するを得べし、特に國史に精通せる足立栗園氏が流暢平易の筆を以て簡明に叙述せられたるものあれば讀者は一層愉快の中に通讀せらるゝを得ん、四方緇素兩諸君子幸に愛讀を賜はんことを乞ふ

利井老和上題歌 勝山善巧師述

眞俗
 二諦御遺訓御消息說教
 定價金拾貳錢 郵稅金貳錢

眞野大誓師述 下間安海師校訂

聖人御繪傳勸說

全六冊 定價金六拾錢 郵稅金拾錢
 本書は四幅の御繪傳十五段を通じて悉く繪解し宗祖大師御一生の間御化導に就て御苦勞の有様を逐一指説せしめしものあれば本宗有縁の緇素乞ふ一讀あれ

勸學小山憲榮師序文赤松連城師題字
 朔月政臣師著述

明治二世因果證據錄
 全五冊 定價金五拾錢 郵稅金八錢
 ○神道ヨリ佛道ヲ難ス ○佛道ヨリ神道ヲ反難ス ○神道ノ大綱ヲ辯ス ○神道所立ノ後生ヲ辯ス ○廣ク俗難ヲ舉テ是ヲ破ス ○三世因果生死輪廻ノ説 ○人ハ必ス前生アリト云フ證據ヲ示ス ○人ハ必ス後生アリト云フ證據ヲ示ス ○地獄極樂有無ノ論 ○極樂ノ有無ヲ決ス ○地獄ノ有無ヲ決ス ○地獄極樂實驗ノ例證 ○神佛三道ノ同異勝劣ヲ辯ス ○善惡ノ標準ヲ辯ス ○善惡ノ種類ヲ辯ス

校點淨土三部妙典

勸學足利義山校閱

佛說三部妙典 句讀清濁字音 付中形全二冊
 全四冊 實價七拾五錢 郵稅拾六錢
 四冊 實價七拾五錢 郵稅拾六錢
 二冊 實價七拾五錢 郵稅拾六錢
 一冊 實價七拾五錢 郵稅拾六錢

司教稻葉一進師標註

標註淨土三部經 實價廿五錢 郵稅四錢
 三部經延書 實價廿五錢 郵稅六錢

佛說阿彌陀經 實價拾參錢 郵稅貳錢
 佛說阿彌陀經 實價拾參錢 郵稅貳錢
 佛說阿彌陀經 實價拾參錢 郵稅貳錢

寸二書經典 正信偈和讚御文章 實價六拾五錢 郵稅六錢

寸二書經典 正信偈和讚 實價四拾五錢 郵稅四錢

校訂正信偈和讚 實價四拾錢 郵稅六錢

校訂正信偈和讚 實價四拾錢 郵稅六錢

校訂正信偈和讚 實價四拾錢 郵稅六錢

眞在家勤行集 實價拾參錢 郵稅貳錢

眞宗偈文集 實價拾參錢 郵稅貳錢

勤行正信偈和讚 實價拾參錢 郵稅貳錢

遊業摺絹表紙 實價拾參錢 郵稅貳錢
 中正信偈和讚 實價拾參錢 郵稅貳錢

大内青巒 佛敎演說外護編 全三冊 實價金八十錢 紙數七百餘頁 郵稅拾錢

居士演說 泰斗 內青巒先生が愛國護法の旨趣に依り近來紳士豪

流暢 宗敎家或政治家若學者若軍人等に向つて演說せられたる

首肯すべく高尙深遠なる佛敎の妙學術又は何事か信念有るもの

無盡 教を演説せられたる實に佛敎の精髄たるや論なく布敎の實典

大内青巒 正信 佛講話 實價 金十二錢 郵稅 金二錢

居士述 正信 佛講話 實價 金十二錢 郵稅 金二錢

正信 佛講話 實價 金十二錢 郵稅 金二錢

以て何人にも入つたならば却て正信佛偈には昔から學者たちの註解も

は是非一讀すべきの良書にして亦信徒への施本には此上もなき良書なり

勸學利井鮮妙師題辭 西應寺善巧師述

二諦 五惡段百席談

定價 金五拾五錢 郵稅 金拾錢 石版表裝美本全二冊

釋尊出世の本懷大無量壽經五惡段は佛に因縁の有無 人倫五常の道

五惡を誡め 因果應報 遁れ難き道理を説き 末世今日の人心浮薄にし

目前見事 徒 因果應報 遁れ難き道理を説き 末世今日の人心浮薄にし

縁の非ら 妄誕怪奇の俗談 多くして未だ時世に適當なる談書甚だ稀

西應寺善巧師 大師の講説に基き順次に文 一宗の肝要たる眞俗二

巧師が 大師の講説に基き順次に文 一宗の肝要たる眞俗二

三諦に涉り特に俗諦門に最も力を盡し譬 天竺因縁や支那譬喩

三諦に涉り特に俗諦門に最も力を盡し譬 天竺因縁や支那譬喩

六字釋法話 定價 金六錢 郵稅 金貳錢

利井鮮 妙師著 六字釋法話 定價 金六錢 郵稅 金貳錢

本書は利井和尚が有縁の信徒に法話せられしものにして法味愛樂の助縁とす良書あり

勸學赤松連城師題宇故勸學見敬院針水和上述勸學島地默雷師校閱序

寶章卅一論題講說

全二册 定價金卅八錢 郵税金八錢

本書は故勸學見敬院針水和上存生の節宗學者及び布教家の請ひに應じ眞宗安心の龜鑑たる御文章中肝腎の安心論題の外に必要の論題に付き文章平易を以て懇切明了に講述されたる遺稿を島地和上の精密なる校閲を経て出版せし者あらば宗學專修者は勿論布教家諸彦は座右缺くべからざる良書なり

論題 彌陀ヲタノムニケ玉ヘト申スニ淨土ヲチカフニ彌陀ヲ歸命スルニヒツトスカ
リ一念多念ニ慶喜金剛ニ機法一體ニ佛心凡心一體ニ不來迎義ニ南無阿彌陀佛ト云本願ニ三信一心ニ一念發起ニ平生業成ニ十却久遠ニ六字釋義ニ正雜二行ニ往還
回向ニ攝取ト光明トノ二ニ神明三箇條ニ眞實報土ニ信心モウセ候ベシニ五帖中ノ
教行信證ニ法華同時ニ王法仁義ニ五重義相ニ阿彌陀如來ノ仰セニ珠數ヲモツニ宿
善有無分別ニ回向不回向ニ淨土眞宗トコウヲ生レ初メシヨリ定業等

小泉了諦師述

宗一門二礎談 一名 明治活說教

定價金拾六錢 郵税金四錢

本書は眞諦門凡夫趣入の要路ニ俗諦門信者處世の要路の二門を開き内に於て眞實信心を報土往生の正因ニ稱名念佛を報恩謝徳の要務ニ王法人倫を念佛行者の行義の三礎を立て信心正因に稱名報恩の義を明了に水際を分ち懇切に辨しあれば法味愛樂に至極適當の良書なり

勸學小山慈榮師題宇 西應寺壽山善巧師述

正信偈百席談

(總平かな付) 表裝美麗 全貳册 實價五十錢 郵税金八錢

古來正信偈に就て談録多ありと雖も或は義理に偏し或は俗談に流れ未だ其中を得たる者なし内地雜居の今日に於て事實相違せる妄誕不稽なる天竺話の怪奇因縁を説き却て其信仰を失せしむるに至ては遺憾千萬也然るに本書は當時教界に有名なる西應寺善巧師が諸大家の講説に基き能く義理を極め蘊奧を盡し席を一百に分ち毎席時勢に適切せる新鮮なる譬喩因縁を加へ眞俗二諦に涉り誰人も了解し得べき條辨述されたる古今未曾有の良書なれば尙本宗に流を汲むの諸彦一日も缺くべからざる書也
大内青巖居士演譯 安藤正純師和解 (總假名附)

淨土妙典二部經譯解

極美製 全一册 實價五十錢 郵税金六錢

淨土三部經は淨土門正依の本經にして彌陀淨教の極致他力易行の玄旨此中に窮盡して餘す所なし此故に其名號の法味を愛樂し現當二世の勝益を受けんと願ふものは此三經に由て具に其玄底を叩かざるべからず然れども自己の應見に任じて恣に之を涉獵せんか佛祖の眞意を認るの眞あり之に由て古來之が註解講録にして世に行はる者少からずと雖も難讀難解難論復雜專門の佛學者に便なれども世上一般を益することなし爰に於て平易通俗に三經の玄旨を叙し淨土門内外の人をして淨土門の大要を知了せしめんとて佛門の泰斗大内青巖居士に乞ふてこれが演譯を爲し淨土門の大家安藤正純師を煩はしてこれが和解を施したるものなれば苟も佛敎の門に遊んで醍醐の法味を味はんことせらるゝ人は一日も坐右に缺く可からざる良書なり

大谷勝珍師題字・府川惠音師著作
島地默雷師校閱 茨木彌三郎氏撰曲

●常盤之旭陽 實價六錢 郵稅貳錢

本書は宗祖大師の御威徳を賞嘆し在世の古を
追慕せしめん爲め唱歌に著されし者なれば我
宗に流を汲む者は是非一讀あるべき良書なり

村雲宮日榮尼公御題字
京都少女唱歌會長田島教惠氏編纂

●教訓唱歌集 實價八錢 郵稅貳錢

本書は氏の創設に掛る少女唱歌會員が會て小
松宮山階宮兩殿下及久我尼宮村雲尼宮兩殿下
其他高貴の御前に於て奏樂唱歌し奉りたる者
を紀念の爲に編纂せられ之を公にすることに
せり益し是れ世の風教を裨益するに足らんか
利井明師題字藤峯教惠作歌(木版譜附)

●見眞御傳記唱歌 實價一冊貳錢

本書は攝州少年端身會教誨員藤峰教惠師が會
て御傳記十五段の大意を極めて平易に唱歌に
作り該會員をして唱和せしめられしを今般利
井和上の校閲を経て田嶋羽堂氏に曲譜を乞ひ
出版せしものなれば降誕會或は報恩講又は其
他佛事法會の唱歌用に尤も適當なり

梅田教圓氏著

●親鸞歎美唱歌 全一冊 實價四錢 郵稅貳錢

本書は祖師聖人御傳記を唱歌體に造り大阪愛
國少年會員千數百名に頒布せられし者なれば
少年教會唱歌用に尤も適當の良書なり

●上人歎德唱歌 實價一冊 貳錢 郵稅五錢

右は蓮如上人御一代記を唱歌體に造りし者
して少年教會唱歌用に尤も適當の良書なり

●大無量壽經曼陀羅 實價參拾五錢 郵稅貳錢

全壹紙 彩色極上等綾地表具實價八圓
●彩色別上等本金襴表具實價拾五圓

●御親筆佛前懸額 實價拾錢 郵稅貳錢

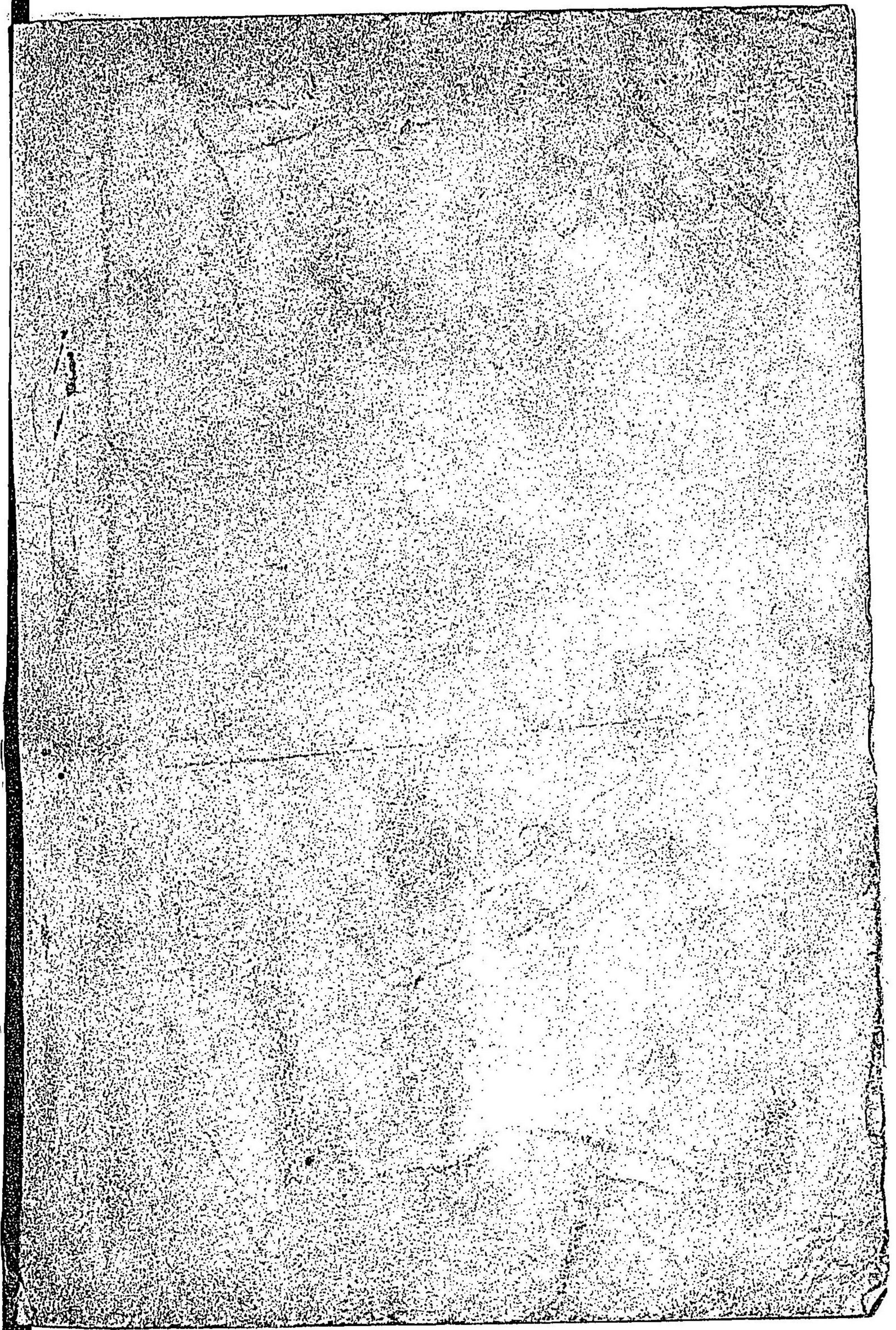
●大法會御行列圖 實價五厘六枚 郵稅貳錢

文學博士南條文雄師題字 國母社編輯局編纂 (文章平易總かな附)

●三教佛事物問答五百題 全 紙數四百餘頁 實價四拾五錢 郵稅八錢

◎目次の大要

教旨相承 日本現在の宗旨、法相、華嚴、天台、眞言、融通念佛、淨土、法
數名目 曹洞、黃檗、眞宗、日蓮、時宗等宗旨の要旨及史傳の大意を叙す
生、十、大、弟、子、戒、五、濁、二、門、二、乘、三、世、三、法、印、四、恩、四、諦、四、弘、誓、願、五、
の、教、理、に、互、て、極、て、肝、要、切、實、の、名、目、を、説、明、叙、述、す
經、卷、大、藏、經、佛、像、佛、具、卓、圓、羅、網、鏡、鉢、鈴、磬、法、衣、法、具、珠、念、
錫、杖、等、佛、子、如、意、三、衣、紫、衣、金、襴、等、寺、錄、僧、位、の、初、寺、祿、の、初、僧、官、
衣、修、多、羅、直、綴、六、物、袈、裟、の、由、來、等、施、食、諸、會、式、典、
大、和、尚、座、主、長、者、律、師、等、佛、事、由、來、祖、師、善、知、識、長、老、寄、附、過、去、
御、修、法、維、摩、會、報、恩、講、佛、葬、の、初、佛、事、由、來、祖、師、善、知、識、長、老、寄、附、過、去、
會、十、夜、法、要、報、恩、講、佛、葬、の、初、佛、事、由、來、祖、師、善、知、識、長、老、寄、附、過、去、
婆、石、塔、追、善、の、心、得、佛、葬、の、初、佛、事、由、來、祖、師、善、知、識、長、老、寄、附、過、去、
火、葬、の、初、引、導、の、事、年、忌、の、事、佛、事、由、來、祖、師、善、知、識、長、老、寄、附、過、去、
帳、位、牌、幽、靈、の、事、斷、末、魔、の、事、佛、事、由、來、祖、師、善、知、識、長、老、寄、附、過、去、
事、祠、堂、金、逆、修、等、總、計、五、百、題



聖人御一代記説教

紙數七百有餘頁
石印表紙美本
定價金八拾錢郵
税金拾錢
特別割引金七拾
錢郵稅拾錢

本書發行以來非常なる好評を得初版賣切れ一師發行す

高祖聖人の事跡に付ては小説的の傳記種々ありと雖も未だ通俗平易を主とし言文一致を以て説教體に辨したる書籍なり本書は先きに蓮如上人一代記説教を著して大に好評を博せられたる徹照師が獨得の滑積流暢の辨を以て聖人諸傳記の内より英を摘み華を拾ひ聖人御一代御化導の御苦勞に付き譬喩因縁和歌を交へ如何なる婦女子たりと雖も了解易き様詳細に實地説教せられしものなれば本宗有縁の諸彦熟讀し高祖の洪恩を讃歎し以て法味愛業の助縁となされん事を乞

蓮如上人御一代記説教

青瀬徹照師述 全一冊

正價金廿五錢
郵稅金六錢

蓮如上人御奇蹟説教

同 師 著

定價金貳拾錢
郵稅金四錢

親鸞聖人御一代記説教

紙數七百有餘頁
石版表紙美本
定價金八拾錢郵
税金拾錢本月
特別割引金七拾
錢郵稅拾錢

本書發行以來非常なる好評を得初版賣切れ一師發行す

高祖聖人の事跡に付ては小説的の傳記種々ありと雖も未だ通俗平易を主とし言文一致を以て説教體に辨したる書籍なり本書は先きに蓮如上人一代記説教を著して大に好評を博せられたる徹照師が獨得の滑積流暢の辨を以て聖人諸傳記の内より英を摘み華を拾ひ聖人御一代御化導の御苦勞に付き譬喩因縁和歌を交へ如何なる婦女子たりと雖も了解易き様詳細に實地説教せられしものなれば本宗有縁の諸彦熟讀し高祖の洪恩を讃歎し以て法味愛業の助縁となされん事を乞

蓮如上人御一代記説教

青瀬徹照師述 全一冊

正價金廿五錢
郵稅金六錢

蓮如上人御奇蹟説教

同 師 著

定價金貳拾錢
郵稅金四錢